

2020年3月期 第2四半期 決算説明会 質疑応答（サマリー）

日時：2019年11月8日（金） 16:00～17:00

説明者：取締役副社長 CFO・財務部長 宮崎純一

決算資料：https://www.nissanchem.co.jp/ir_info/archive/cf/s2019_11_08.pdf

■ 全社

Q1：化学品と機能性材料について、設備投資・研究開発費共に5月の想定から減額されている。投資関連は、今後は減少する傾向に転じると考えてよいのか。

A1：機能性につきましては、主に半導体を中心に設備投資等について見直し、一部延期とした計画があります。基本的に減額は一時的なものです。化学品につきましても、上期のマーケットの状況を鑑みまして、一部の設備計画を後ろ倒しにいたしました。

Q2：日産化学は継続的な自己株式の取得を行ってきた。3,000億円、4,000億円レベルの大規模なM&Aを行う場合、借入だけでなく増資も視野に入ってくるのか。

A2：M&Aに関しては、各事業部へ自由に行うように申し上げておりますが、金額の上限があります。当社は単体ベースで総合職が約1,200人しかおりませんので、3,000億円、4,000億円レベルの規模の会社は買収してもマネジメントが出来ないと考えています。買収規模の上限につきましては、格付けで1ランク下がるレベルの借入額までを許容する考え方で計算しています。また、現金も十分余っている状況です。こちらの余剰資金と先ほどの借入額を足し合わせますと、数百億円単位の規模のものは買える計算となります。

■ 化学品セグメント

Q3：化学品は全体的に上期（4-9月）での下ぶれ幅が大きかった。下期での回復を予想している背景を教えてください。

A3：前年度は上期までは順調でしたが、下期は米中貿易摩擦などの影響を受けて急激に落ち込みました。そのため今年度の下期の増益幅が相対的に大きく見えております。またテピックやメラミンなどの主要輸出製品で、事業環境の回復を織り込んでいます。それ以外の品目につきましては、上期は主要ユーザーの稼働低下等で落ち込んだ部分も多く、その分の下期での戻りを期待しています。

Q4：メラミンの市況は底ばいが続いているが、足元では回復の兆しが見えているのか。

A4：メラミンの市況は前年度の10月までに比べて、3割程度下落しています。その傾向は今も変わっておりませんが、若干の回復を下期には織り込んでおります。

■機能性材料セグメント

Q5：液晶パネルのマーケットは、下期はかなり厳しくなると言われているが、サンエバーはどうか。

A5：サンエバーに関しては、3Qは2Q並みで推移し、4Qは少し落ちるだろうと見ています。

Q6：サンエバーのVAモードの上期売上について、競合やマーケットの状況と比べて伸びが非常に強いようだが、背景を教えてください。また、価格面での動きはどうか。

A6：VAは、既存顧客のシェア維持に加えて、新規顧客を獲得出来ております。この新規顧客での稼働が想定以上に好調に推移しており、結果として競合やマーケット全体が弱含む中、当社売上は強く伸ばいたしました。価格はほぼ5月当初の想定どおりの動きでした。

Q7：サンエバーの光IPSモードの売上が好調だが、これはスマートフォンの貢献度が大きいのか。

A7：スマホ向けも好調ですが、ノートPCやモニターなどスマホ以外のアプリケーションへ光IPSの浸透が拡大していることも増加要因となっております。今年度年間の売上予想の増収につきましては、スマホによるものが半分、それ以外が残り半分を占めています。

Q8：サンエバーの光IPSモードの価格が、上期実績・下期予想ともに5月当初の想定と比べて上ぶれている。その背景について教えてください。

A8：価格については、当初の想定よりも下落を抑えられている状況です。競合材料と比較して、当社材料の性能優位性を確保できていることが一番の要因です。当社が競合よりも先行して開発を進めていることが、早期の新ニーズ把握と、いち早い開発への着手へ繋がっていると考えております。

■農業化学品セグメント

Q9：今回、フルララネルの売上高を5月当初の予想からわずかに下方修正しているが、この背景を教えてください。また、ブラベクトの在庫調整の進捗は。

A9：主に円高の影響です。MSD*社のブラベクトの在庫調整に関しましては未確定な部分が多く、まだ完全に終わってはいないだろうということで堅めには見ておりますが、4Qのフルララネルの売上予想は前年比で増収を見ています。

Q10：ゾエティスがシンパリカトリオという三種混合剤を上市予定だが、競合になりえるか。

A10：競合新剤として認識しておりますが、世界的に見てもブラベクトは大きなシェアを占

めており、市場全体もまだ成長を続けているということで、シンパカトリオが必ずしも大きな脅威になるとは考えておりません。また、MSD 社も先日の決算説明会で同様の三種対象をカバーする混合剤を開発していると明言しております。MSD 社としましても動物薬に関しましては多種多様な製品を取りそろえていくことが重要だと考えており、鋭意開発を進めていると聞いております。

Q11：ブラベクトの中国上市は、フルララネルの売上としてどれくらい下期に織り込まれているのか。

A11：国ごとの販売計画を MSD 社から聞いているわけではありませんので、中国向けの売上は、中期経営計画を含め会社計画には入っておりません。

Q12：中国におけるペット向け動物薬のマーケットサイズはどれくらいなのか教えてほしい。

A12：潜在的には非常に大きいと聞いておりますが、確固とした情報を MSD 社から得ておりませんので、定量的な情報をお伝えすることが出来ません。当社独自の調査ではペットとしての犬の頭数は約 5,000 万匹と言われております。この点においてはそれなりの販売量が期待出来ると考えております。

*MSD: 米国メルク社のアニマルヘルス事業部門 MSD Animal Health 社の略称

以上